

---

# 鉄拳更正

プライア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鉄拳更正

### 【Nコード】

N3532H

### 【作者名】

プライア

### 【あらすじ】

不良女子ボスの目崎文がある日の下校時に生徒会長に呼び止められる。殴りにかかる文だが生徒会長には攻撃が通じず、逆に生徒会長に自慢である高い鼻を攻撃されてしまう。そして、生徒会長の文への鉄拳による更正が始まった。（暴力的な描写が苦手な方にはこの小説を読むことをお勧め出来ません）

「その不良待ちなさい！」

「あん？」

ある日文は学校から帰ろうとしたところ何者か呼び止められた。文は他の不良女子から呼ばれたと思っていたがそれは文の学校の生徒会長だった。

「あなた最近校内でいろんな子からカツアゲしてるそうね。自分のやってることの非道さ分かってるの？」

「は？何調子のつたこと言ってるの？ボッコにされたいみたいね。」  
文は身構えた。しかし生徒会長は構えない。文はいつものように生徒会長の顔を目掛けて殴りかかった。

ブオッ

「ふん。」

サッ

「何！？」

何と生徒会長は文の攻撃を受け流した。これには文もびっくりした。校内で最強の地位を確立していた文にとってこれほど意外なことはなかった。

「手を出すのはやめて今から相談室に来なさい。そして今まで奪った金を返しなさい。」

「は！ふざけんてめえ！」

ブオッ

文はさらに殴りにかかった。すると生徒会長は今度は身構えた。

「仕方ないわね。」

スッ

「な！？」

文の攻撃をまた受け流し、そして・・・

バスウッ

「ああっ!!」

一瞬の攻撃が文を襲い悲鳴を上げた。それはあまりにもスマートに無駄がなくきまった。

ツッ

文の鼻から一筋の鼻血がもれた。生徒会長は一瞬で文の鼻に一撃を加えたのだ。今までこれほど正確に文の鼻に攻撃を加えられたことはなかった。

「私は無駄な攻撃をしない。あなたのその高いお鼻の鼻先だけを狙わせてもらいます。まだ続けるつもりですか？」

「くっ!調子に乗るな!」

文はさらに襲いかかった。しかし生徒会長はすでに見切っていた。スッ

「あっ!」

「仕方ないですね。鼻への攻撃は激痛ですよ。」

バスッ バスウッ

「あうう!」

ドクドクドクドク

生徒会長の正確かつ強力な攻撃は文の鼻先を確実に捉えていた。鼻血はますます悪化していく。

「く・・・そ・・・」

「鼻は痛いでしょう。鼻は人間が感じる最も痛みに敏感な場所。あなたほど鼻の高い人ともなればその痛みはよりいっそう大きなものになります。」

「くっ!なめるな!てめえなんかに負けるか!」

ブオッ

「まだ分からないようですね。仕方ありません。」

スッ

ドガアッ

「あががあっ!」

ブシューウウッ

生徒会長の裏拳が見事に文の鼻に入った。文の鼻からは鼻血が一層噴き出していく。

「これほどあなたが物分かりが悪いのもあなたが自身の力を過信しているところがあるからでしょう。鼻の高い人間が生意気だというのはどうやら本当のようですな。」

「くっ！貴様！」

「こうなってしまうってはもう口では分かってもらえませんか。更生のためにあなたのその天狗と化した高いお鼻をへし折って差し上げましょう。」

スッ

「えっ!?!」

文は生徒会長のあまりに素早い動きが目が追い付かなかった。そして次の瞬間・

バスウッ

「あ！」

バスバスバスッ

「ああああ・・・」

あまりにも早すぎる攻撃に文は圧倒された。何発も拳が文の鼻先に叩きこまれていく。鼻の痛みは一気に通りすぎていき感覚はマヒしていた。文の気力が失われはじめた。

バスバスバスッ

「鼻が・・・」

バスバスバスッ

「は・・・な・・・が・・・」

ムクムク

文の鼻は少し赤く変色して腫れてきた。1発2発3発・・・文の鼻は杭にとんかちを打つようにどんどん打ちこまれていく。生徒会長の宣言通り文の鼻はどんどん拳を叩き込まれへし折られようとしている。

バスバスバスッ

「うううう・・・」

バスバスバスッ

「あううう・・・」

文の口からもはやうめき声漏れはじめた。鼻を打たれすぎてさっきまでの強気な文はほとんどん力がなくなってきた。しかし生徒会長は容赦せずただ文の鼻先一点にひたすら拳をたたきこんでいく。

バスバスバスッ

ドクドクドクドク

「う・・・くっ・・・」

バスバスバスッ

ドクドクドクドク

「は・・・な・・・があ・・・」

バスバスバスッ

「うううう・・・あううう・・・」

バスバスバスッ

「あううううう・・・」

ドクドクドクドクドクドクドク

文の鼻血の量が増した。もはや文の鼻は痛々しく変色している。とつくに声も力のないうめき声に変わっていた。

そしてとうとう文の心は折れた。

バスバスバスッ

「あ・・・あうううう・・・い・・・いやだああ・・・」

「ん？」

バスバスバスッ

「うぐうう・・・ゆ・・・るし・・・てえ・・・」

「あらあらこれはこれは。」

バスバスバスッ

「・・・あうう・・・たえ・・・ら・・・れ・・・ない・・・は・・・  
な・・・あ・・・」

「命乞いですか。天下の不良女子のボスもやはり一点への攻撃には耐えられなかったようですね。」

生徒会長は攻撃を止めた。文の表情はすっかりなくなってしまうていた。鼻への激痛。自分自身の最強が打ち崩されたことへの幻滅。自慢の鼻が少しずつ破壊されていくことへの無力感。文はすっかり心が折れてしまった。

ドクドクドクドク

「今までこんなに鼻に拳を打ち込まれたことはなかったでしょう。自慢の高いお鼻をここまで攻撃されて己の過信に気がついたようですね。プライドを捨ててもこれ以上みじめな姿にされたくないに見える。」

「て．．．い．．．が．．．く．．．に．．．な．．．りま．．．す．．．  
．．．お．．．か．．．ね．．．も．．．か．．．え．．．し．．．  
．．．ま．．．す．．．」

「後は？」

「こう．．．せ．．．い．．．し．．．ま．．．す．．．  
ふ．．．りよ．．．う．．．や．．．め．．．て．．．ま．．．  
じ．．．め．．．に．．．な．．．り．．．ま．．．す．．．  
．．．」

文は落ちた。鼻へのひたすらの攻撃によって文の天狗になっていた鼻はへし折られた。力に屈し更生すると約束した。

「そうですか、よく言いました。」

「．．．だ．．．か．．．ら．．．は．．．な．．．  
．．．」

「それは違います。」

「え．．．？」

「今まであなたはこれと同じように嫌がる人からお金を奪い暴力を奮ってきました。今度はあなたが罰として同じ目に合う番です。あなたの鼻をつぶします。」

「そ．．．ん．．．な．．．は．．．な．．．しが．．．」

バスバスバスッ

「ああ・・・あ・・・」

生徒会長は再び拳を文の鼻に打ち込みはじめた。今度こそ本気で文の鼻を折るつもりだ。

「罪を償いなさい。残念でしたね折角こんなに高いお鼻してましたのに。」

バスバスバスッ

「あ・・・が・・・はな・・・お・・・れ・・・る・・・」

バスバスッ

「お・・・お・・・れ・・・る・・・う・・・」

シャー---

あまりに鼻を打たれすぎて鼻を折られるという恐怖心が一杯になり文はおもろししてしまった。もう文にはどうすることもできない。

バスバスバスッ

ドクドクドク

「ああ・・・は・・・な・・・が・・・いた・・・い・・・」

ドスウッ

「はっはっはっ！！」

「もう終わりにしましょう。」

ドスッドスッ

「あがっ・・・うっぐううっ・・・」

ドスッドスッ

「あぐうっ・・・あや・・・の・・・は・・・な・・・が・・・」

ドスッドスッ

「あうううっ・・・はな・・・が・・・お・・・れ・・・る・・・」

ドスッドスッ

「は・・・な・・・が・・・あ・・・」

バキイイイイッ



ドバアアアアッ

「あぶつうつうううつ・・・」

生徒会長の正拳が完全に文の鼻にぶちこまれ文の鼻はついに折れてしまった。さんさんパンチを打たれ、低く鈍い音を立てながら無残に折れた。文の無様なうめき声と共にドス黒い鼻血がドバドバと流れていく。

「鼻が折れてどんな気分ですか目崎文。今まであなたはこれと同じことをもつと大人数の弱者に対してやってきました。ここ何年間において最もたちの悪かった不良としてあなたはこの罰を受ける運命だったのです。」

「は・・・な・・・が・・・あ・・・」

「目崎文。頭髪服装違反、金髪、化粧、ルーズソックス、スカート  
の長さ、喫煙、暴力、恐喝。不良女子ボスをやめ、更生し、その罰  
として鼻を破壊しました。」

しかしこれですべてが終わったわけではなかった。

「それでは最後の罰として鼻をぺしゃんにします。」

「・・・え・・・?」

「これで本当に終わりです。」

「そ・・・ん・・・な・・・や・・・め・・・てえ・・・  
・・・」

「問答無用です。はあああ」

「や・・・め・・・て・・・え・・・」

文はもはやすっかり半泣きになっていた。しかし生徒会長はすっかりそんなことはおかまないなだった。そして今までのどれよりも強い最強の正拳が文の折れた鼻に叩きこまれた。  
ブオッ

グシャアアアアッ

「ああ・・・」

文の鼻は生徒会長のこぶしの中で果てた。文の鼻は骨折を通りすぎてつぶされていた。文の鼻は砕かれた。そう、ぺしゃんこにされてしまった。

「あ……ぶ……う……う……」

文は叫ぶ気力が無くなりただ本能のままにみじめにうめいた。鼻はまっ平らになった。鼻はぺしゃんこになってしまった。あんなに高さが自慢だった文の鼻がぺしゃんこになってしまった。

フラッ

ドサッ

文は仰向けに倒れた。

ドバドバドバドバ

「……あ……や……の……」

ムクムクムクムク

「は……な……が……」

……」

ムクムクムク

ガクッ

ぺしゃんこにされた文の鼻はそのまま赤く大きく大きくはれていった。そして文は気を失った。

それから数週間後

「最近文さん見ないよな。」

「うん、連絡取れないよね。ただ学校さぼってるだけかもしれないけど。」

カツカツカツ

「その不良たち校則違反は早速直してもらいます。」

「あん！なんだとてめえ！調子乗ってんのか！」

「あら？あなたたちのボスはとっくに落ちたわよ。」

「え！？」

「文さんが……？」

「は！？そんなわけねーだろ！」

「じゃあ合わせてあげる。目崎さん来なさい。」  
カツカツカツ

「文さん？……ってえ??」

「うそ……」

「……」

みんなの前に現れた文の姿はすっかり変わっていた。顔はふせていたが紙は真っ黒くなり、服装もちゃんとしている。みんなには信じられなかった。

「顔を上げなさい。目崎さん。」

「……」

「はやく。」

「……。はい……」

パツ

「あああ……」

顔を上げた文を見て不良たちは驚いた。文の鼻は以前のように高くなく、完全に潰されてしまっていたのだ。鼻はぺしゃんこになっていた。

「あなたたちも目崎さんのようにされたくなければ早く更生なさい。このようにみじめに鼻を潰されるような思いをしたくなければね。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3532h/>

---

鉄拳更正

2010年10月10日06時50分発行